

(2) 帰化雑草の防除

近年、麦、大豆、飼料畑等で帰化アサガオ類、アレチウリ、オオブタクサ等の多様な草種の帰化雑草が増殖し、大きな問題となっている。また、水稲作においては問題にならないことが多いため、水田畦畔や稲刈り後の畦畔等に生育しているも見逃している可能性がある。

これらの帰化雑草は除草剤の効果が明確でなかったり、低かったりする。一旦まん延すると防除は困難であるため、侵入初期の段階で徹底的に防除することが重要である。一度ほ場に侵入し、繁殖すると防除には多大な労力を要する。したがって、これらの雑草はまずほ場内に侵入させないことが重要である。

そこで、難防除帰化雑草に対しては予防を原則とし、まだ被害が顕在化していない段階から警戒する必要がある。まだ見つからない場合は「地域内に入れない」、見つかった場合でも「地域内全体に広げない」、そして種子生産を防止して被害を最小限に抑えることが対策の基本である。なお、アレチウリは特定外来生物に指定されており、生きたまま植物体(発芽可能な種子を含む)を他の場所に移動させることが規制されているので、手取り除草を行う場合には注意が必要である。

侵入後の防除には年月を要するので、発生分布を地図に示し、被害程度を数値化し、生産物の収量や品質等を含めた防除効果の明確化によって計画的に取り組む。

田畑輪かんのほ場や畦畔等、水で遠距離移動する草種については、ほ場スケールや集落スケールだけではなく、流域スケールでも対策を講じる必要がある。

草種によって効果的な防除法が異なるので、同定が不可欠である。不明な場合は、農林総合研究センター等の関係機関と連携し同定する。なお、同定に当たっては、雑草の多様なステージや角度で撮影した写真が便利である。

大豆畑における帰化アサガオ類の防除方法等について、下記、農研機構のホームページを参照のこと。
(http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/046256.html)

帰化アサガオ

帰化アサガオは条件が良いと一株で数千～数万粒の種子を作る。種子は寿命が長く、土の中で何年も生きていて、水田にしても死なない。ほ場周辺をよく観察し、帰化アサガオを見つけたら、種子ができる前に防除する。

ほ場内に侵入したら防除がますます困難になる。土壌処理剤や選択性茎葉処理剤が効きにくく、つるがまきつくため機械除草も困難である。ほ場周辺においても密度が高くなると、防除が困難になる。侵入初期の防除が有効である。

帰化アサガオを地域全体にまん延させないため、侵入初期に種子を作らせないタイミングでの防除が重要である。

アレチウリ

北米原産の帰化植物。つる性で5～8mに達する。軟毛に覆われた丈夫な約10cmの葉柄に、最大25cmの5浅裂の葉身がつく。

水系で種子が移動し拡散している可能性が高い。水田輪作地帯では地域全体に急速に拡散することが懸念される。少数でも見つけたらすぐに防除し、地域全体へのまん延を防ぐ必要がある。

花期が8月下旬以降であることから、それ以降種子を付けさせないことが重要。特に、稲刈り後に発生したアレチウリが種子を作るまで生育する事例も観察されていることから、秋に残存している個体についても徹底防除する。

オオブタクサ

北米原産の帰化植物。原産地では高さ3～6mにもなるが、国内では2～3m程度。茎も葉もざらつく。葉は対生で、葉柄は長く、葉身は20～30cmとなる。葉身は掌状に3～5裂し、クワの葉に似る。種子で繁殖する。土中の種子寿命は21年にも及ぶ。出芽深度は、2～16cm。春からだんだら発生する。成長が速く他の作物や雑草を競合で抑圧する。7月中旬より開花・結実する。

オオブタクサは7月中旬以降に結実するため、大豆などの実取り用の作物で手取り除草が困難なまん延圃場では、種子生産を防ぐことは難しい。多刈りする牧草などに転換するなど、種子を生産させずに埋土種子をできるだけ減らす対策が必要である。ただし、水稲へ戻すと水系で他のほ場へ拡散させる危険性がある。水稲に戻す場合には他のほ場の拡散がないか地域全体でのモニタリングが必要である。